

国際シンポジウム
＜植民地朝鮮における帝国日本の古代史研究
近代東アジアの考古学・歴史学・文化財政策＞
2016年4月22—23日

各講演主旨

「朝鮮古代史研究と植民地主義の克服」

李成市（早稲田大学）

解放後に南北朝鮮の学界から「植民地史観」と批判される植民地期の日本の朝鮮古代史研究の特徴はどのようなものであり、それらは、解放後の南北朝鮮の研究を如何に知的拘束したのか。解放後のナショナル・ヒストリー（あるいはショービニズムに陥る古代史研究）を規定することになる植民地期の日本人による古代史研究を克服するための批判的検討は、どうあるべきかについても併せて論じたい。

「朝鮮総督府による古蹟調査と博物館の役割」

崔錫榮（大韓民国国立劇場公演芸術博物館）

1900年ごろから東京帝国大学の命令を受け、日本の研究者たちは韓国に渡って古跡などに対する考古学・人類学的な調査と発掘を行い、その成果が朝鮮の李王家博物館と朝鮮総督府博物館、日本にある東京皇室博物館と東京帝国大学などにおいて展示・表象された。朝鮮総督府博物館は、1915年9月から10月まで開催された朝鮮物産共進会の時に唯一永久的な建物として立てられ、共進会の開催期間中にはそれまでの考古・美術調査の成果を展示した美術館なのであった。帝国日本にとって、植民地での古跡調査と発掘事業の狙いは古代日本の歴史を探るとともに、古代朝鮮・中国・日本の政治的関係を明らかにすることにあつた。これは、日本による朝鮮統治の当為的談論を見い出すだけではなく、日本考古学の学問的進展にも影響を及ぼすことになった。日本国家は、明治期にはいり<日本>と<日本民族>を作り出すための<古器旧物>の保護や保存を余儀なくされ関連法律を定めていく一方、これを調査と研究、教育するために東京人類

学会(1884年)と考古学会(1894年)が出来上がり、その会員たちは日本の領域内外で遺物の収集と所蔵に大きな関心をよせた。ところが一つ注意すべきは、帝国日本の統治領域で出土・収集した遺物をその領域の外へ持ち出すことを禁ずる法的條項はなかったということである。この発表では、帝国日本による朝鮮植民地での古跡発掘と博物館の関わりあいを取り上げ、日本の植民地営みの有り様について考察したいと思う。

「植民地朝鮮における考古学調査・古蹟保存と、それを通してみた朝鮮古代史像」

早乙女雅博（東京大学）

本講演において次の内容を論じたい。

(1) 古蹟調査のはじまり 1900-1908 (古蹟調査の目的、建築調査、遺蹟調査、古蹟調査へと変化)。(2) 関野貞の古蹟調査 1909-1915 (半島全域の古蹟調査、甲. 乙. 丙. 丁の4等級、日本の古社寺調査に基づく経験、仏国寺の保存事業、関野貞の古蹟調査及び保存に関する提言)。(3) 古蹟調査委員会による調査と保存 1916-1920 (「古蹟及び遺物保存規則」にみる文化財の登録制度、古蹟調査委員会による5か年計画、一般調査、特別調査)。(4) 古蹟調査に関わった考古学者の古代史像と歴史学者の古代史像 (石器時代の人々と新羅伽耶の人々、「任那日本府」に対する考古学者と歴史学者の考え方の違い)。

「京都帝国大学考古学研究室からみた朝鮮総督府の古蹟調査事業」

吉井秀夫（京都大学）

1909年、京都帝国大学文科大学（後の文学部）に講師として赴任した濱田耕作は、1913年から1916年までイギリス・ロンドン大学で欧米考古学の理論・方法論を学び、帰国後、日本で最初の考古学研究室を開設した。そして、1918年に朝鮮古蹟調査委員に選ばれてから、濱田は朝鮮古蹟調査事業に深く関わっていくことになる。また、第2代教授の梅原末治、第3代教授の有光教一をはじめとして、少なからずの考古学研究室員が、さまざまな形で朝鮮古蹟調査事業に参加することとなった。

本報告は、朝鮮古蹟調査事業に参加した経験が、京都帝国大学考古学研究室

によって進められたさまざまな考古学的調査研究に、どのような影響を与えたかについて検討をおこなう。具体的には、(1) 1918年～1920年(星州・高霊・昌寧調査、金海貝塚調査)、(2) 1921年～1930年(金冠塚発見以後)、(3) 1931年～1945年(朝鮮古蹟調査会の発足から敗戦まで)の各時期における様相を検討する予定である。

「朝鮮総督府による朝鮮史料の収集と編纂」

箱石 大(東京大学史料編纂所)

朝鮮総督府が実施した朝鮮史編纂事業は、東京帝国大学の日本史史料編纂事業、文部省の明治維新史料編纂事業とともに、国家的に行なわれた歴史編纂事業としては、近代日本における三大歴史編纂事業の一つに数えられよう。従来、この朝鮮史編纂事業は、帝国日本による植民地朝鮮の統治・支配をめぐる問題の中で検討の対象とされ、事業の実態やその歴史的な性格などが解明されてきた。一方で、これは史学史上の重要問題でもあるが、とくに日本では、朝鮮史研究あるいは日朝関係史研究の研究史の一環として取り上げられることはあっても、近代日本史学史の問題として、日本史研究の側から注目されることは少なかったように思われる。本報告では、朝鮮史編纂事業の日本側担当者たちが、近代的で学術的なものと過信していた当時の日本における最新の歴史編纂技法なるものが、実は、明治期以来、紆余曲折を経ながら形成されてきた日本史学(国史学)のための方法・技術であって、そもそも朝鮮史に適合的なものではなかったことに加え、植民地朝鮮に導入された編纂技法それ自体にも様々な問題点が内在していたという点を明らかにしたい。

“Visualizing Imperial Destinations: Travel Media Art and the Photographic Classification of Chōsen’s Ruins” (帝国の名勝地を視覚化する—朝鮮植民地古跡の写真分類と観光メディア)

Pai Hyung Il (University of California, Santa Barbara)

This paper analyzes the visual, disciplinary, and commercial legacies of the first generation of media images depicting ancient remains in the Korean peninsula dating back to the late 19th-early 20th century. The paper is divided into three parts tracing the multiple origins, archival sources, and producers involved in creating, inscribing and

disseminating ruins photography (古蹟写真) targeting a mass audience. As one of the most popular photographic genres since the late-nineteenth century, Korea's archaeological and travel archives are now preserved in both public and private museum and library collections not only in South Korea, but, also in Japan, and the U.S. (eg. Busan Museum, International Center for Japanese Studies, Kyoto University, MFA Boston, California Museum of Photography, UC Riverside). The contextualization of the archaeological, ethnographic, and heritage knowledge contained in these colonial archives are significant because these turn of the century images portraying the sublime beauty and sadness of ruins represented by temples, tombs, palaces, and pagodas framing seductive courtesans, palace ladies, shamans, and deposed royals were pivotal in the formulation of the enduring tourist image of Korea as a country with the most authentic, "picturesque" and "time-less" imperial destinations in the Japanese empire.

「植民地学としての東アジア考古学～その理念と実践の比較検討～」

藤原貞朗（茨城大学）

日本が朝鮮、台湾、満州で独占的に考古学を展開していた 20 世紀前半期、イギリスはインドとビルマで、オランダはインドネシア、フランスは仏領インドシナで、考古学調査・研究を独占していた。（また、中国には、イギリス、ロシア、スウェーデン、アメリカ合衆国、フランス、ドイツ、そして日本の調査団が入り、独自の考古学的調査を行っていた。）いわゆる列強国による帝国主義時代、東アジアの近代的な考古学は「植民地学」として始まり、発掘・保存・復元等の作業が行われていた。しかし、各国の考古学が、いかなる理念と法令のもとで、どのような考古学的実践がなされていたのかを総合的に比較することは、これまでほとんどなされていない。本発表では、インドシナでのフランスの活動と朝鮮や中国での日本の活動を主に比較しながら、東アジアの考古学史を総合的に整理する出発点としたい。比較によって、各国の植民地考古学の特徴と問題点を明らかにすることができるだろう。
